



君津市 地震ハザードマップ (君津地区)

近年全国各地で、規模の大きな地震災害が多発しています。大地震から生命、財産を守るためには、住宅・建築物の耐震化が極めて重要です。

君津市では、市周辺で発生する恐れがある地震を想定し、震度を示した「揺れやすさマップ」と、建物被害を相対的に示した「地域の危険度マップ」を作成し、地震対策に関する情報を記載した「君津市 地震ハザードマップ」を作成しました。

このマップから揺れやすさや危険度を確認し、ご家族の皆さんや地域の皆さんとともに、お住まいや職場等での地震対策を推進してください。

平成20年3月

君津市

1 このマップができるまで

市域を50mのメッシュに分割します。

想定地震ごと、メッシュごとに地表での震度を予測します。

複数の想定地震の予測結果を重ね合わせ、最も大きい震度を抽出し、メッシュを色分けします。

<揺れやすさマップ>

震度を基に地域内の建物の中で全壊（※）する建物の割合（危険度）を予測します。

危険度に応じてメッシュを色分けします。

<地域の危険度マップ>

※全壊とは

「全壊」とは、台風や地震などの自然災害による建物の被害の程度の中でも、もっとも大きく被害を受けた状態を指します。具体的には、平成13年の6月に国によって定められた「災害の被害認定基準」の中で「住居がその居住のための基本的機能を喪失したもの」と定義されています。

無被害	一部損壊	半壊
被害が生じていない状態を指します。	壁面の亀裂が生じている。外装に若干の剥離がある等の状態を指します。	居住のための基本的な機能の一部を失った状態を指します。
	住宅の全体、もしくは一部の建物が全て倒壊している。	外壁や柱の傾斜が1/20以上である。
居住のための基本的な機能を失った状態を指します。		

出所：内閣府「災害に関する住宅の被害認定基準運用指針」、中央防災会議「東南海地震・南海地震等に関する専門調査会」資料を参考に作成

2 地震はなぜ起こるのか

●海溝型地震と直下型（内陸型）地震

日本でおきる地震には、大きく分けて2つのタイプ（海溝型地震、直下型（内陸型）地震）があり、地震をひきおこすメカニズムは、全く異なります。

●海溝型地震

地球をおおっている10数枚の板状の岩盤（プレート）のうち、日本列島には太平洋プレートが年間約9cm、フィリピン海プレートが年間約3cmで沈み込んでいます。

この海のプレートが沈みこむ時に陸のプレートの端が巻き込まれ、やがて、陸のプレートの端は反発してはね上がり、巨大な地震を起こします。

この地震を海溝型地震と呼びます。

●直下型（内陸型）地震

海のプレートの動きによって、陸のプレートが圧迫され、内陸部の岩盤に歪みが生じます。この歪みが大きくなると、内陸部の地中にあるプレート内部の弱い部分が破壊が起き、地震となります。

規模は、海溝型の巨大地震に比べると小さいですが、局地的に激震をもたらします。

この地震を直下型（内陸型）地震と呼びます。

●震度

「震度」とは、地表で感じる揺れの強さを、気象庁や各自治体の観測点で、計測震度計により観測して発表されるものです。

●マグニチュード（M）

「マグニチュード」（Magnitude）は、地震の規模そのものを表す尺度で、頭文字をとってMOO(数値)と表現する。マグニチュードが1上がる、と、地震のエネルギーは約30倍になります。

3 想定される地震

君津市に大きな影響を及ぼすと考えられる地震として次の地震を想定しました。

- 元禄地震（マグニチュード8.2）の再来
- 全国どこでも起こりうる直下の地震（マグニチュード6.9）

これまでの調査から、君津市に最も大きな影響を及ぼす地震として、相模トラフ上の断層運動である元禄地震（マグニチュード8.2）を想定しました。図の赤線や赤破線で囲まれた範囲は想定する断層面を表しています。

これは別にマグニチュード6クラスの地震では、地震の断層が地表にあらわれない場合があり、こうした地震はいつ、どこで起こるかわからないため、今回は、君津市直下にマグニチュード6クラスの最大のマグニチュード6.9の地震を想定しました。図の青青色で示す君津市の全範囲で地震の発生を想定しています。

